



Sayoko Suwabe  
Portfolio  
Edition4.8

諏訪部佐代子  
Sayoko Suwabe  
sayokosuwabes.com

### 《Statement》

諏訪部はペインターとしてのキャリアを発端として、イメージの創造、持続や消失に対する疑問への応答としてインスタレーションを発表する。空間で現象することやそこでの対話を第一として捉えており、彼女の作品はその場の揺らぎや含みと共演する。人間のコントロール可能な領域が日々広がりを見せ、文化が自然を凌駕しようとする中、コントロール不可能な時間という概念を人々が文化的にどう解釈しているか。それを理解するため、今日のアーティストとして自身の理論と実作を行き来する制作をしている。

### 《Bio》

1995年千葉県生まれ。2019年東京藝術大学美術学部油画専攻卒業、2023年同大学院グローバルアートプラクティス修士課程修了。卒業制作展 2017で「サロン・ド・プランタン賞」、修士卒業制作展 2022で「GAP賞」受賞。

インスタレーション作品を中心に、パフォーマンスや彫刻など幅広いメディアで制作を行う。現代の現象や先入観を、モデルの構築を通して解釈することに重点を置いて制作している。現在、アーティストコレクティブ [実践考古学] 及び [NULLNULL STUDIO] のメンバーとしても活動している。メルボルン大学ヴィクトリアンカレッジオブアーツのMCAコースでの交換留学を経て、現在メルボルンと東京を拠点に活動中。

### 《CV》

#### 【Education】

- 2015-19 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻
- 2019- 東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻
- 2022 メルボルン大学美術研究科 ヴィクトリアンカレッジオブアーツ MCA コース 交換留学

#### 【Award&Grant】

- 2022 **GAP Award** [ 修了制作作品 ]
- 2021 **VIVA Award** [NULLNULL STUDIO]
- 2020 **文部科学省トビタテ！留学 JAPAN 奨学生**
- 2019 **サロンドプランタン賞** [ 卒業制作作品 ]
- 野村財団芸術文化助成** [ 実践考古学 ]
- 2017 **安宅賞**
- 石橋財団国際交流奨学金**

#### 【Show&Project】 ( 展示タイトル , スペース , 都市 )

##### [Solo Exhibition]

- 2022 **Vicissitudes: decay and transmutation of images**, Dark Horse Experiment, メルボルン
- 2021 **Unspecified Landscapes**, BUoY アートスペース, 東京
- 2017 **Hogehogefugafuga**, CCP atelier, 東京

##### [Curation]

- 2021 **Not for sale**, たいけん美じゅつ場 VIVA, 取手
- それぞれのさよなら展**, CCP atelier, 東京
- NULLNULL**, NULLNULL STUDIO, 取手
- 2016 **あなたの声がききたくて**, 上野商店街, 東京

##### [Correction]

- 2022- **Unspecified Landscapes**, 東京藝術大学国際交流棟パブリックアートプロジェクト, 東京
- 2019- **分節 - 09/03/2017 12:41:10**, 県立千葉高等学校付属美術館, 千葉

#### [Group Exhibition&Project]

- 2023 **Les coordonnées : points organiques**, 国際大学都市レバノン館 Salle Khouzami, パリ
- 2022 **Dookie Campus レジデンスプログラム**, Dookie Campus, ドゥーキー
- Do my feet still touch the ground?**, TUA Artspace, 東京
- Do my feet still touch the ground?**, VCA Artspace, メルボルン
- The graduation exhibition**, 東京藝大美術館, 東京
- 2021 **タマプロ**, 3331 アートフェア, 東京
- Not for sale**, たいけん美じゅつ場 VIVA, 取手
- Residency program**, VIVA, 取手
- アラカルト 8th**, 船橋市民ギャラリー, 船橋
- それぞれのさよなら展**, CCP atelier, 東京
- NULLNULL**, NULLNULL STUDIO, 取手
- 2020 **There's nothing left to do but let time pass**, オンラインパフォーマンス, オンライン
- TURN in TAIWAN project**, 太宰府天満宮, 福岡
- 2019 **ホリゾンとタブローの実践考古学**, 旧中西夏之アトリエ, 山梨
- ロンドンユニットプログラム**, ロンドン芸術大学セントラルセントマーチンズ校, ロンドン
- Graduation Exhibition**, 東京都美術館, 東京
- 2017 **ユリアンアヌラーシュ Yürüyen Anılar [walking memories]**, Yuga gallery, 東京
- 石橋財団奨学生展**, 東京藝大美術館陳列館, 東京
- 1000 days to go!**, 東京スカイツリー, 東京
- 2016 **あなたの声がききたくて**, 上野商店街, 東京
- 2015 **いつかどこかで見たような**, 上野桜木あたり, 東京





"The Eternal Dreamtime"  
2017  
FRP, oil paintings, water  
3000 × 3000 × 300mm

Photo : Yoko Saito



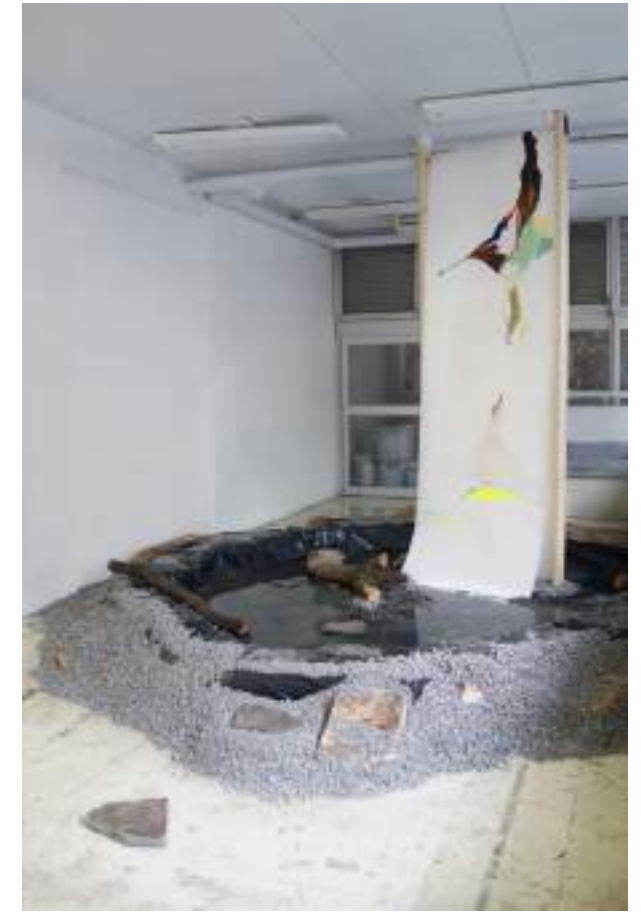
### 現在拡張のドローイング

ジ・エターナル・ドリームタイムは、オーストラリアのとある先住民がもつ概念である。それはどの瞬間にも回帰することができ、時間とは永遠のものであるという観念。昨日、明日、過去、未来—は存在せず、あるのは「今」といくつかの記憶だけである—そう定義すると、自己という概念は非常に危ういものになりうる。極端な話をすれば、私たちは宇宙人に記憶を書き換えられ、今この場所にいるだけであるかもしれない。自我同一性が過去と現在、未来の自己存在が同一であるということから規定されているのであれば、自我とは非常に曖昧なものに過ぎない。アボリジニの言葉を借りれば、私たちはただドリームタイムの海に、いくつかの記憶とともに存在しているだけだ。当作品は、時計とは異なる形で時間のイメージを計測、共有するために制作された。今、この瞬間、この作品を見ている時間こそが「ジ・エターナル・ドリームタイム」であると作家は定義している。



"Mementomori"  
2017  
Wood, stone, Kozo paper, oil painting, water painting, vinyl, water  
4000 × 5000 × 3000mm

Photo : Yoko Saito



### パフォーマンス - イメージの死

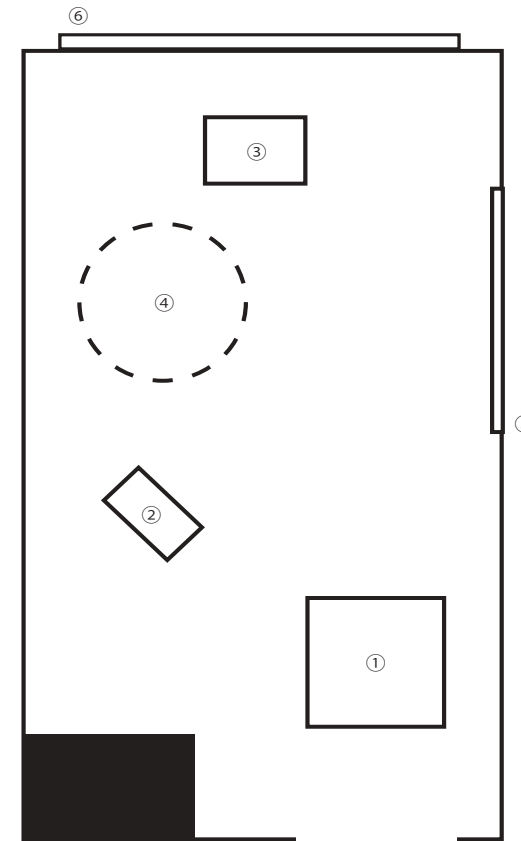
五日間の展示のうち、三日目にドローイングを水舟の中で洗うパフォーマンスを行うことで、三日だけ存在する絵画の場を設定した。  
これは、絵画の死は何かという問いのためのドローイングの一つである。データ上のイメージが氾濫する現代、作品自体の表情など後々いくらでも操作できるようになってしまった時代で、実物の損失を考えてみるために拵えた舞台である。  
このコンセプトは、オーストラリア先住民のとある一族が、自分の絵を自分が亡くなった時に廃棄するよう博物館に依頼しているという話から影響を受けている。自分の絵は一族の誰もが描けるストーリーであると彼らは語るが、それではその絵画は何のために存在するのだろうか。



"分節 - 09/03/2017 12:41:10  
2019  
Cement, video, 2'31, loop, resin, plaster, parametric speaker  
4218 × 4311 × 8024mm

Photo : Ujin Matsuo





- ①print on paper, 4000×900×900mm
- ②plaster, resin, 1000×200×500mm
- ③cement, asphalt, 900×300×400mm
- ④sound, 0' 10, loop(time signal of 12:41:10), parametric speaker
- ⑤movie, 2' 31, loop
- ⑥window



### はかられた時間のかたちを疑う用途の空間

当作品では人新世としての今現代、人間の尺度を自然に認識することを促すものを配置し、再掲することで人の営みのうちにある時間を考えるためのしつらえにする空間づくりを試みている。地層は人間が分析可能な歴史の象徴である。人間は堆積の上に文明を作り上げた。この空間の窓下に見える風景は、まさにこの現在の一つの層を表しているが、これは不変のものではなく過去の一時点、未来の一時点では様相を変えるものである。概念としてのレイヤーを表現するため、セメント作品の積層の輪郭がなぞられている。映像作品にはタイムスタンプが押され、あたかもこの映像が撮影された時がこの数字であるかのように振舞う - まるでブロックチェーンのように。また、頭上に取り付けられたパラメトリックスピーカーからは映像と相対的に呼応する時間の時報が流されている。ただの記憶、記録でしか過去は表せず、空想や計算でしか未来は表せないということに目を向けるための作品である。この部屋は与えられた時間の概念を疑うために存在する。



"Artificial erosion"  
2019  
Marble, vinegar, wood  
900 × 900 × 200mm

Photo : Ryusuke Kido



### 設定された風化

この液体は展示期間中大理石の侵食を続け、人工的風景を作る。鑑賞者は急激な風化の目撃者になる。

管理者不在の状況において永久にサステナブルな建造物は存在しない。どこかから切り取ってきた石を使用した個人の墓的なモニュメントは爆発的に増えている。何が残り、何がのちの知能にどのように解釈されるのか。

これは世界に点在する遺構である。



“かつてこの星を毛のない猿が支配していたらしい”  
2020  
Glass, sand stone, concrete  
600 × 450 × 800mm

Photo : Hyunjoo Choo



### ポスト・人新世

人類はコンクリートで土地を埋め立て安全な暮らしを手に入れてきた。何世紀もあと、人間が絶滅し名のない知的生命体がこの星を支配し始める。後々の生命体にはこの地質年代がどう解釈されるのだろうか。私たち人類は層状に積み重なった地面を分析することで過去を想像した。人新世より後、を想像するインスタレーション。またこの構築物には蟻が群がり、蝸牛が這う。沼に浸かり現在進行形で風化し、違う生物の栖に成っている。



"An archive of Saruhashi workshop"  
2020  
Stones in Katsuragawa river, concrete  
450 × 600 × 150mm

Photo: Yuri Kato



**猿橋で行われた石拾いワークショップのアーカイブ。  
参加者によって拾われた石を切断し、コンクリートで固めて断面を磨いたもの。**

当ワークショップでは、当地域で限定的に見られる特徴的な石を拾い記録する行為を参加者とともに行った。南側のがけは、6000年前に富士山から流れ出した溶岩からできている断崖地帯であり、この辺りで取れる石は富士山の溶岩、火山礫、火山灰やそれによる圧力などに影響されている。

諏訪部は彼らが拾った石を持ち帰り、切り出し、磨くことでその石が内包している断面を露呈する。絵画的な断面とそこに流れている悠久の時間を体感するワークショップ。

<http://www.yhdzn.com/jissenkokogaku/workshop/>

```
sayokos — -bash — 80x24
-bash: suod: command not found
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:15:38
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:15:42
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo sysetrmset up -gettime
sudo: sysetrmset: command not found
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemssetu -gettime
sudo: systemssetu: command not found
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:15:59
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:16:02
[MacBook-Pro:~ sayokos$ suo systemsetup -gettime
-bash: suo: command not found
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo ystemsetup -gettime
sudo: ystemsetup: command not found
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:16:12
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:16:15
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemsetup -gettime
Time: 16:16:18
[MacBook-Pro:~ sayokos$ sudo systemse
```



## Covid-19 下のオンラインパフォーマンス

```
sudo systemsetup -gettime
```

これはラップトップが持っている時間データを呼び出すただのコード。画面を共有しているおおよそ 30 名のアーティストに向けて行った 20 分に及ぶオンラインパフォーマンス。

人類は今改めてウイルスという上位存在に気づいた。ここ数世紀、自分達種族を脅かす存在は同じ人類だけであると人々は過信していた。Covid-19 の存在は大きかったと言える。今回のオンライン展示は時間によってただ区切られたフォームだけ与えられた自由な構成であった。我々は時計を見て時間を判断するが、この箱を疑うことから始めるパフォーマンス。一個人がただターミナルから十分間そのパソコンが保持する時間を呼び出し続ける行為の共有。時折エラーが起こり、また新たにその時間が呼び出される。リピートすること、時間潰し、恐怖、人生、気の狂い、単調で孤独な毎日に対する応答として。

これは人類特有の層状の時間感覚を表す、時間として取り寄せた瞬間に過去になってしまう様子、人間の営みの可視化のアナロジー。

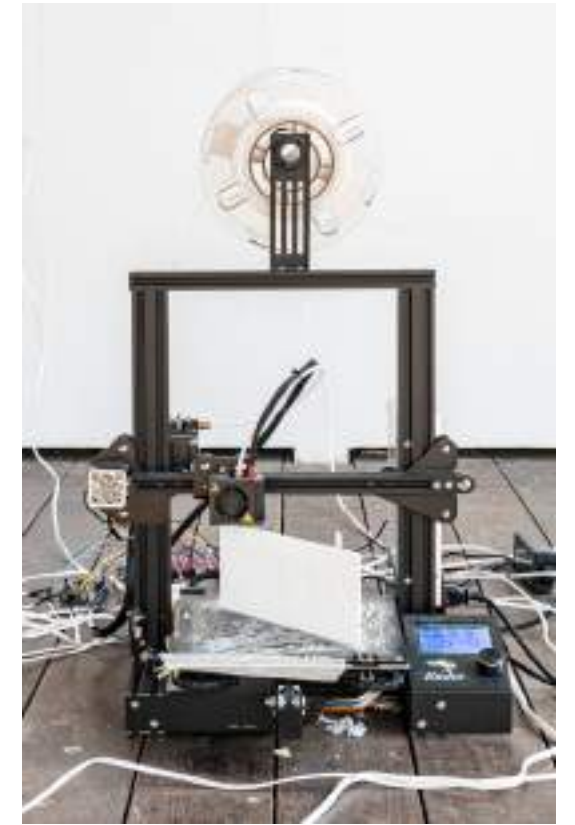
パフォーマンスとして定義したのは、これが肉体的な疲労を伴っているため。彼女の指は特定の時間が過ぎるまで同じコードを永遠に打ち続ける。指が止まってしまえばこのコードが打たれることはない。

このどうしようもない暗闇で何をするのか？ 経った時間を見る行為の共有をオンラインで行う試み。



"Unspecified Landscapes"  
2022  
PLA, 3D printer  
Dimensions Variable

Photo : "Global Art Practice, Graduate School of Fine Arts,  
Tokyo University of the Arts, 2021  
Photo: Kenta Kawagoe



### プラスチックから生まれる不変の風景

〈場所や時間が特定できない〉と作家自ら定義した景色の写真、画像のシリーズでリレーショナルな空間を構成する。この世に遍く全ての事物は必ずどこか特定の時代・場所に紐づけられている。

イメージはそれぞれその時代の特徴を知らず知らずのうちにふくむ。ブロックチェーンが発達してしまえば全ての事物は各時代との住所づけが不可避になるだろうという自らの予測に基づき、アンチアーカイブを目指す画像シリーズ。

我々はもはや、〈時代の紐付けから逃げられない〉世代である。炭素量の分析が可能になったことで、あらゆる物体は特定の時代に誕生したものであるという決定をせざるを得なくなっていく。ゆらぎ、ゆとりを伴ったゆるやかな認識はこれからどんどん行き場をなくし、人々から想像する力を奪うかもしれない。入手可能な情報が増えてしまったことはある点においては絶望的である。住所不定の画像・イメージ、おそらくそういったイメージはどんどん行き場をなくしていくことだろう。自分の居住地から離れることの難しい Covid-19 時代で、特に人工物のない風景を探すことの困難さをきっかけとして生まれた作品。



"The image no longer exists"  
2022  
Acrylic on canvas, water  
Dimensions variable

Video: Jiawei Li / Andrea Illés



### 自画像を水の中で洗うパフォーマンス

[This installation may contain specific content]

この空間は、上記のステートメントから始まり、特定のイメージからの逃避行として表現されている。

特定されることから逃れることをコンセプトとした明滅する光とプラスチックのインスタレーションを展示しながら、自画像を水洗いするパフォーマンスを通して、イメージの時間軸に対する問いを投げかけた。

また、粒子が水に移っていくパフォーマンスと同時に、かつての自画像のイメージが輪郭ごとキャンバスから切り離され床に投影されている。我々が絵画だと思っているもの、イメージとして抱いているものは、誰かが加工したイメージや記憶に過ぎない。イメージの本体である絵画そのものは、今この瞬間も変容している。絵画は本来、その物質性なしには存在しえないものであるが、現代においてそれらは物質的な身体以外の身体 (jpg や png のような形で) を与えられているため、それを認識することは難しい。この 15 分のパフォーマンスで彼女は、私たちの頭の中にある絵画と呼ばれるもののイメージを追い続けた。

天井から聞こえてくる音は、でたらめな (ランダムな) 時間を伝えるタイムシグナルである。現代人の多くは、時間は直線的で不可逆的であるという前提で生きているが、私はこの前提に馴染まず、子供の頃から過去と未来がこの一瞬のために存在すると妄想して生きてきた。このタイムシグナルの目的は、自分にとってのコンフォートゾーンを作ることであり、この時間がいつでもあり得るということを示唆することである。



"Port Phillip Bay"  
2022  
Lime stone, luminescent paint  
150 × 150 × 200mm

Photo: Astrid Mulder



### メルボルン湾を彫刻する

メルボルンがメルボルンという名前を与えられて以来、その文化圏は大きく変容し、誰も本来の土地の区分を完全に知らない。コンクリートで変形された水路や道路がそれをあいまいにしている。

ポートメルボルンはもともと湾ではなくただの乾いた土地であり、洪水によって海の一部となったという説がある。この事実は、現地の先住民の人たちによって、民間伝承として語り継がれてきた。この継承という行為に敬意を表して、海の形を彫刻するため、直方体から海を彫り出した。この作品は、2022年時点の現在の湾岸線をもとに作成されたフィクションである。

この作品では、石灰岩にメルボルンの港の形を描き、その形に沿った形を切り出し、暗闇で光る顔料で着色した樹脂素材を流し込んでいる。ここには、この事実への反響が込められている。切り出されたままの直線と地形に沿った有機的な線、この2種類の線がこの彫刻には存在している。実際の地形がこのように直方体に切り取られることはないが、地形を無視して土地を分断する行いに言及したものである。

また、意図的に湾内よりも海側を低く作っているが、これはメルボルンの実際の歴史にちなんだものである。我々が当たり前だと思っている地形や風景は簡単に換えられるものであり、眼下の風景に問いかけるために、日々刻々と変容していることを示唆している。

石灰石は建築に適した素材で、古くはエジプトのピラミッドに使われていた。数千年もの間、人々の生活を支えてきた堆積岩の一種。柔らかい素材のため、吸水性がある。オーストラリアには石灰岩のビーチがあり、この素材と強い親和性を持っている。

この彫刻行為は、何万年もかけて形成され存在してきた石灰岩の塊を、エゴイスティックに削り直すものである。







"Joe"  
2015  
Oil on canvas  
150 × 200mm



"Toride drawing"  
2015  
Oil on paper  
600 × 800mm



"Apartment LALA"  
2016  
Oil on canvas  
727 × 606mm



"Songline"  
2016  
Copper plate etching print on paper  
100 × 180mm



"Shell gathering"  
2017  
Copper plate etching print on paper  
240 × 160mm



"A drawing on the cliff"  
2017  
Copper plate etching print on paper  
240 × 160mm



"The Katsuragawa river"  
2019  
Copper plate etching print on paper  
150 × 150mm



"Yellow monkey"  
2019  
Digital drawing  
Dimensions variable





"Nude with morning sunlight"  
2021  
Oil on canvas  
333 × 242mm

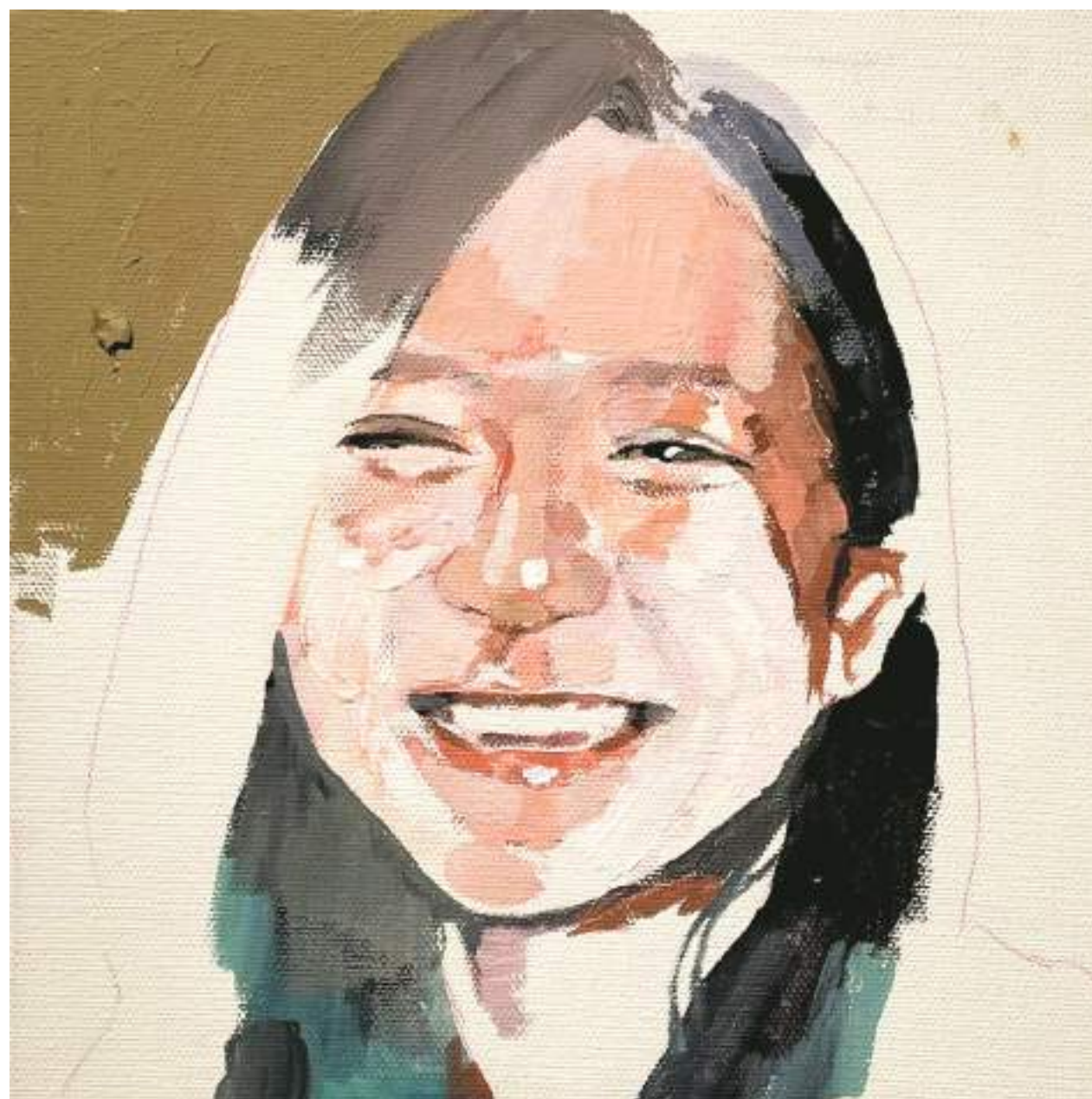


"Pink hour"  
2021  
Oil on cloth  
1400 × 4500mm

Photo: Yuri Kato



"Self-esteem"  
2021  
Acrylic on canvas  
333 × 242mm



"Hyunjoo Choo"  
2021  
Acrylic on canvas  
300 × 300mm



"Performance as a monkey"  
2021  
Performance with Hideki Kimishima  
Dimensions variable

Photo: Mei Miyauchi



"A blanket from 8000km away"  
2022  
Acrylic on canvas  
333 × 242mm





"Horizont and Tableau: Practical Archeology at Natsuyuki Nakanishi Former Atelier"  
2019  
旧中西夏之アトリエ  
Curation: Sanghae Kwon

Photo: Hayato Kurobe





### 台風によって変形した地形の記録

さかのぼると縄文時代の遺跡や土器が発見される当地域は、富士山系から流れる桂川が削り作り出された地形を持つ。この桂川がもたらす水産物を狩り、人々は生活をなしていた。切り立った渓谷を成す猿橋周辺は土地の形状上農耕、定住には向かず、弥生時代になると人の影はなくなる。しかし600年ごろには「猿橋」の原型ができていたと言われる。この猿橋は木材をそのまま崖に突き刺し作られている(切り立った崖により橋桁が下ろせないため)非常に珍しい構造を持ち、全国から構造を学ぶために多くの設計士が訪れたそうだ。近世になると、猿橋は武蔵国、甲斐国と相模国の交通拠点として、1902年に中央線が開通し鉄道のハブ機能が大月にできるまで栄えた。

以降大月は養蚕に向き、東京中心部へのアクセスが良いという理由などから絹の名産地となり、同時に富士登山の玄関口としてにぎわうようになる。そして中国へその機能が移転した後、かつて絹の工場であった当アトリエを使い始めたのが中西夏之だ。2000年代までは多摩地域の企業などに通勤する人々のベッドタウンの機能を持っていたが長期不況の都心回帰現象で通勤者および人口は減少しつつある…、さて2019年、我々はこの地を訪れた。

初めて訪れた大月アトリエで、ゾワゾワと身震いがしたのは、非再現的で一回性の強いハプニングの中に自分がいる、その感覚からだ。今また本の中で、話の中で、スタジオの中で、この地に生きていたと想像されている“彼ら”の存在を確実に意識する。また自分の素材に向かう。この往き来、実践ができる居場所がアーティストコレクティブ実践考古学である。

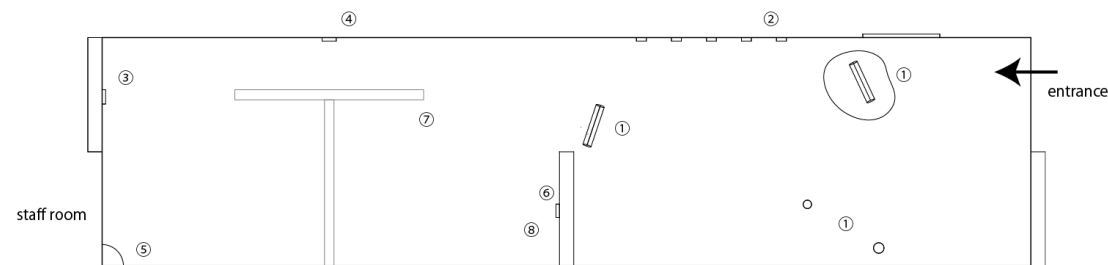
2019年9月には史上最大規模の台風が日本を襲い、猿橋エリアでも都心からのルートが全滅するなどの被害を受けた。猿橋周辺は目に見えて水量が増し、経路も変わった。この展示では、増水後の川の形状と増水前の川の形状をなぞり作った彫刻作品と再現性の低い不定形で造形したガラスの作品を展示。





個展 "Unspecified Landscapes"  
2021  
BUoY Artspace

Photo: Artist



①コンクリートは人類の夢を見る  
セメント, 鬼怒川の砂, BUoYの水  
2021  
Dimensions variable

④ Unspecified Landscapes  
PLA 3D printing  
2021  
200\*112.5\*30

⑦舞子の石  
舞子で採取した石  
2021  
Dimensions variable

② Unspecified Landscapes  
楮, パルプ  
2021  
200\*150\*30

⑤ Unspecified Landscapes  
PLA 3D printing  
2021  
200\*112.5\*30

⑧空白を追う  
ポイド管, スピーカー  
2021  
Dimensions variable

③ Unspecified Landscapes  
PLA 3D printing  
2021  
200\*150\*30

⑥ 6時間 22分 18秒 43グラム  
PLA 3D printing  
2021  
Dimensions variable

### Unspecified Landscapes, 不特定の風景たち と名付けられた写真及びインスタレーション作品のシリーズと近年のドローイングの展示

キーワード：アーティスト不在 不特定の風景

本展「Unspecified Landscapes,」では生きた痕跡を残し去っていく人類の独立した思想をBUoYを素材として扱い彫刻した。

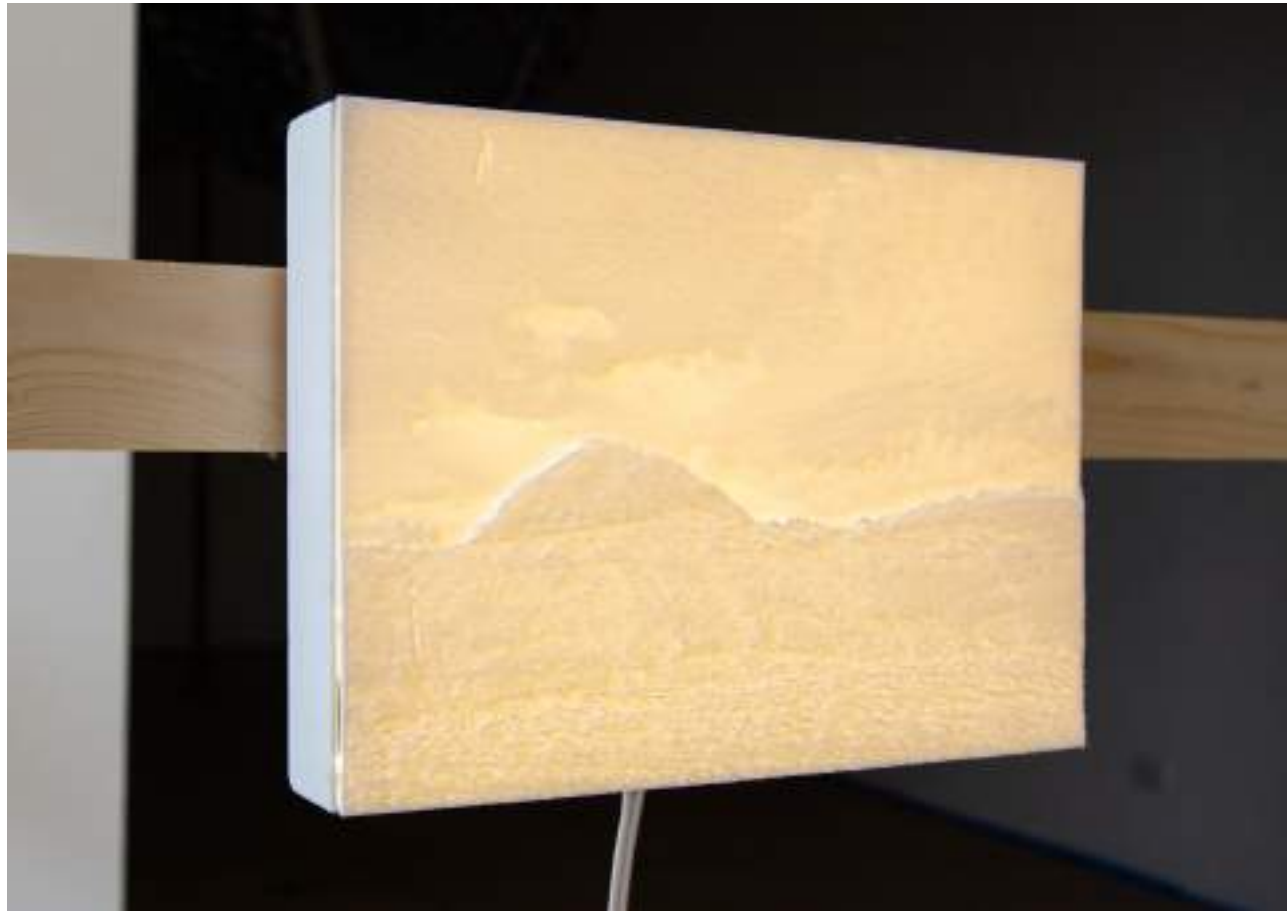
コンクリートの歴史は遡ると9000年も前からそのオリジナルの形があったと言われる。日本では高度経済成長の象徴のように扱われるこれらコンクリートは人間が知らず知らずのうちに残していく素材であり安住の象徴である。そこに立つため、そこに住むために人類はコンクリートで土地を舗装する。災害に苛まれる日本は特にその構造が顕著であり、どこかの土地から今日も砂利が運ばれ、セメントと混ぜられ固められ建物が作られる。化学反応を起こし終えたセメントが勝手に消費されることはない。やがて建物が壊れて瓦礫となりそれを引き取っていく自治体がある。

層理は過去の象徴であり循環ではなく堆積。その下に何が埋まっているかもわからずに層を重ねていく、人類の営みをまなごすための空間。



"Do my feet still touch the ground?"  
2022  
VCA Artspace(Melbourne)

Photo: Panisa Ongwat



Pick up some stones from your local area.  
Record them by following questions.  
Send them by post to Japan



Questions asked while picking up stones  
Write today's date using the alphabet (just for a record)  
Write the weight of your imagination  
Condition: Express using something other than grams, pounds, or tons  
Write the time of discovery  
Condition: Express using units other than years, months, days, or minutes

15 Jan 2022, from Sydney, Australia to Lilly Skp

リモートでの指示書, 2022



Lilly Skipper, Floor Times Two, Rock dust and pencil,  
368x481x324x300x85x213cm, 2022

### Lilly Skipper とのコラボレーション作品 (メルボルン)

このコラボレーションでは、距離と物質的現実を考慮した一連の試みが行われた。Lilly のプロポーザルに触発された諏訪部は、日本の境界を石を使って表す文化「関守石」とオーストラリアへ入国できなかった2年間との関連性を見出し、今回の作品の礎としている。二人は石遊びの実験をもとに、ギャラリー空間の仕切りを遠隔操作で演出する。Lilly のプロジェクトである砂利で象った輪郭は、諏訪部のスタジオの間取りを間接的に再文脈化している。操作され、相対的に現されたフロアは、様々な文脈の表現を引き出し、スタジオとギャラリーの間の空間的境界を越えて、多彩な空間を取り巻く鑑賞者の知覚を分断させる。



"Do my feet still touch the ground?"  
2022  
TUA Artspace(Tokyo)

Photo: Yuri Yamada



Choose the photos from your camera roll  
Record them by following conditions  
Send them by post to Japan

Photographs  
landscape / bush lands  
objects, not too personal  
Unspecified Landscapes (The photos that you can not decide when/where it was shoot)  
ex) Landscapes without artificial stuff, JPG or PNG  
How printed - small, L size (Japan)  
Notes about photos - written together (attach)



15 Jan 2022, from Sayoko Suwabe to Lilly Skij

リモートでの指示書, 2022



Lilly Skipper, Floor Times Two, Rock dust and pencil,  
368x481x324x300x85x213cm, 2022

### Lilly Skipper とのコラボレーション作品 (東京)

42 枚の写真は、コラボレーション開始時の諏訪部の指示書に対する Lilly の返答、壁面の写真は、地理的な距離について話し合うために日本のある場所の全く同じ経度と全く逆の緯度で撮影されたものである。壁に投影された映像は、メルボルンで撮影された一連のパフォーマンス。



個展 "Vicissitudes: decay and transmutation of images"  
2022  
Dark Horse Experiment

Photo: Astrid Mulder





### イメージの崩壊と変容

メルボルンでの初個展となる本展では、プラスチックによる3Dプリンティングを用いたインスタレーション、絵画、版画や日本産の楮とオーストラリアの植物を使った紙すきなど、ドゥーキーレジデンスプログラムやメルボルンで制作した作品を展示し、イメージの崩壊と変容に関するクエスチョンを投げかけた。

**Sayoko Suwabe Portfolio Edition4.8**

2023年1月10日発行

Published on January, 2023

All rights reserved. ©2015-2023 Sayoko Suwabe